

沖縄の文化とともに 歴史を伝える



カフェギャラリー南風

山田 ちづこさん

沖縄から埼玉に

私は沖縄県石垣市に生まれ、7歳まで石垣市で育ちました。父は医者で、戦争

中は軍医としてフィリピンに行かされていました。当時は繰り上げ卒業で医者になったので、父はあまり勉強できなかったことを悔いていました。ですので、子どもが私を含めて4人生まれたあとに、もう一度大学に入り直すことにしました。東京の大学に通うために、私たちが

プロフィール さいたま市中央区在住。1949年沖縄県石垣市生まれ、中、高校は那覇で過ごす。日本女子大学文学部教育学科卒。与野本町通りにある「カフェギャラリー南風」を経営。沖縄料理が味わえ、中高年の居場所として知られている。また、カルチャー教室、歌声、手話、ウクレレ、オカリナ、講談教室、詩の会など開催している。3年前から子ども食堂と、フードパントリーを行なっている。いまや、こどもからシニアまで、多世代の交流の場になっている。大宮区高鼻町に大宮店がある。

ようだいはみんな東京の小学校に転入しました。私は1年生から5年生まで東京の小学校に通いました。父が学位を取ったあとで那覇に戻り、中、高校生時代は那覇で過ごしました。そのあと大学に入学するためにまた東京行き、卒業後はまた沖縄に戻り、沖縄放送協会（現在のNHK沖縄放送局）でディスクジョッキーを5年間務めました。そのころ夫と知り合いました。夫は埼玉の人でしたので、結婚して埼玉にきました。埼玉に住んで

50年近くたちます。

大学が教育学科で、教員資格も取りましたが、どうもあまり教員の仕事が好きではなく、教職に就いたことはありません。我が子が成長し、少し手がはなれてきたころ、大宮の自宅で学習塾をはじめました。「教えない教室」がテーマの学習塾です。子どもは自分の力で伸びるもの、教え込まないほうがいいんだという考えのもとに自学自習をモットーとしていました。子どもが「先生！」と手をあげたときだけそばに行ってみる。よっぽど分からない子どもには答えを見せてしまうこともありましたが、でもそうすると



子ども食堂のボランティアさんたち。選挙で知り合った元教員の方々も立ち上げ当時から手伝ってくれています

子どもは「自分でやる！」と言って問題を解き始めたりするんです。そういった子どもの力を伸ばすことを大事にした学習塾を20年近くやっていました。

地域の居場所が必要

教育で社会を変えようという思いで市議会議員選挙に立候補したこともあり、教育や福祉は選挙の目玉にはならないです。当時、教育虐待を受けてきた子どもによる家庭内暴力の事件などが社会的な問題になっていました。核家族化がすすむなかで、家庭だけで子どもをみるのには限界があります。地域全体で子どもを見守る必要があると思います、「地域こども教室」を立ち上げてボランティアで活動してました。これを広げたいと思います。立候補しましたが、当選はしませんでした。いまさいたま市の事業になっている「放課

後チャレンジスクール」「土曜チャレンジスクール」は、この「地域こども教室」が元になっています。学校と家だけでは息詰まってしまう子どもたちのための居場所が地域に必要だという思いはずっと持っていて、それがいまのこども食堂の活動にもつながっています。

こども食堂をはじめたときは、選挙のときに応援してくれた元教員の方々のつながりで、地域の小学校の校長先生たちに直接お話しする機会があり、チラシも学校にくばることができました。こども食堂は誰が来てもいい場所としておこなっています。こども食堂と同時にフードパントリーもはじめました。こちらは児童扶養手当受給者や障がい者手帳を持っている方などが対象です。このチラシを学校で配るのは難しかったですね。先生は対象の児童がわかっていますが、その子だけに渡すわけにもいきません。ですので、1年に1回、扶養手当を見直す手続きのときにフードパントリーのおしらせをお手紙のなかに入れてもらいました。これで利用者が一気に増えました。フードパントリーは現在さいたま市内に12カ所ありますが、知り合いに会うのを嫌がって、離れた地域から来るひとや、DV



さいたま市内の小学校で対馬丸の紙芝居の読み聞かせと三線の演奏をおこなった

の被害を受けていて本名を明かさずに来るひともいます。

沖縄の料理をメインに、食だけでなく音楽などの文化を伝えたいというのも私のやりたかったことの一つです。父は沖縄の人間国宝の金城次郎さんと親しくしていました。那覇市壺屋というところに金城さんの工房があり、うちがそのすぐそばでした。うちは産婦人科で、金城さんのお孫さんの何人かを父がとりあげました。奥さんが亡くなったあとにはうちに

週3回くらいごはんを食べにきたりして、ずっと交流がありました。金城さんの焼き物や、同じく人間国宝の宮平初子さんの首里織を知ってほしいと思い、25年前に大宮でギャラリーをはじめました。与野のお店はうたごえ喫茶が人気で、コロナ禍もほぼ休まず続けてきました。知らない者どうしがはじめてこのお店にきて、ごはんを食べたりいっしょにうたうことが仲間づくりのきっかけになります。「ここにくればあの人に会える」といったような地域の居場所になっています。

紙芝居で戦争を伝える

戦争中、沖縄から疎開する子どもたちを乗せて九州に向かっていた「対馬丸」が、アメリカ軍の潜水艦の攻撃を受けて沈没し、800人近い子どもを含む多くの犠牲者が出ました。この事件を伝えていくために、沖縄には「対馬丸記念館」があります。その理事をしている友人の紹介で紙芝居を読むことになりました。

子どもたちにどうやって戦争を伝えようか考えていたので、こども食堂で紙芝居を読むことにしました。「2つのランドセル 海にしずんだ対馬丸」「対馬丸へのいのり」宇検村 対馬丸いれいひをたずねて」の2作です。こども食堂で読み聞かせを2回おこないました。

そのあと、地域の小学校の校長先生に声をかけて、小学校で平和学習として紙芝居の読み聞かせが実現しました。とても悲しい話なので、最後に三線の演奏もすることになりました。プロジェクトに紙芝居を映し、低学年、高学年にわけておこないました。

家族でごはんを食べたり、お友だちと遊んだりできるのが当たり前で、平和な毎日を過ごす子どもたちに、こうした歴史を知ってもらいたいと思いましたが、自分たちと年が変わらない子どもたちが死んでしまってお父さんにもお母さんにももう会えない、ランドセルだけが残って帰ってくるというのはとてもショックな話だったのではないでしょうか。子どもたちの感想文は対馬丸記念館に送られたそうです。

戦時中、石垣島の土地は日本軍によって奪われ、住民はみんなマラリアの巣窟

もう一つの戦争・八重山マラリア

終戦近い波照間島。軍の命令で波照マラリアの島の西表島に強制移住させられ、島民の3人に一人が死亡。軍から誘導されて来たスパイ学校出身の男が現れたところから始まる...

監修：石原真実 製作：上地元道 脚本：藤名元俊

ドキュメンタリーNHKBS1スペシャル

～50年目の告白～
「安保の裏方」が見た沖縄

沖縄が本土に置かれて50年。日本国境防衛の要下、アメリカ軍基地を築く基地元との関係を描いた「防衛施設法」の議員を被爆者。沖縄の基地は何を築いたのか。沖縄の人々の心の中に残った記憶「防衛施設法」。日本安全保障を下支えする「防衛」そして、土地の争奪や軍需産業の利益など基地問題に関わる実情を掘り、難しい問題をさらけ出した。今回、実情を語り、秘けた防衛施設の内幕と安全保障の裏面、沖縄の現状と未来を語る。

～沖縄戦で何が起きたのか～今も続く基地と苦悩～

<ドキュメンタリー映画と解説>

2022年 10月29日(土) 開場 14:30/開演 15:00/終了 18:00/定員 60人
資料代/500円/会場/下落合コミュニティセンター 4階 第2,3集会室

<プログラム>

- ★ 沖縄に広がる会場増玉：総会
- ★ もう一つの戦争「八重山マラリア」
- 解説/山田(安室) ちづ子(八重山出身)
- ～10分間休憩～
- ★ 「50年目の告白」安保の裏方が見た沖縄
- ★ 質疑応答

基地を分るの間に

2019/7/15 東京新聞掲載

申し込み/沖縄に広がる会場増玉 事務局 さいたま市中区本町西2-2-24
カフェギアラー南風内山田(安室) 090-4600-1027/chizuko.minakaze.0913@gmail.com

である山の中へ行かされました。波照間島の住民はすべて西表島に移住させられました。沖縄の地上戦で4人に1人が亡くなったと言われているが、マラリアに罹ったことで3人に1人が亡くなったと言われています。これは沖縄に対する差別です。日本軍によって死に追いやられた人がたくさんいます。

台湾で感染症を学んだ祖父はこの「戦争マラリア」に心血を注いで対策をしました。資料もたくさんあり、いまでも残っています。今年はマラリア撲滅60年の節目です。祖父の資料をもとにして「戦争マラリア」について語る会を開催する予定です。

子どもたちに沖縄を知るきっかけを

東京の小学校にいる頃、私は名字(安室)を変えていました。当時沖縄から来ていたひとたちはみんなそうです。「朝鮮人・沖縄人はお断り」と書いてある下宿もあった時代です。

「山田さんって選挙権あるの?」と聞かれたことがあります。選挙に出たときも「沖縄で立候補すればよかったんじゃない?」とも言われました。とても驚きましたが、沖縄は日本ではない、沖縄の人は日本人ではないと思っている人がいる。沖縄に対する差別がまだあるんだというのを感じました。

いまは修学旅行で沖縄に行く学校も増え、美しい海や自然が好きだという人もたくさんいて、沖縄に対する関心は高まっていると思います。だけど、たとえば基地問題のことはみんな知らない。戦後、全国にあった基地が沖縄に押し付けられました。沖縄にはそうしてもいいんだと思っている。日本全体の約0・6%の面積しかない沖縄に、在日米軍基地の70%

が集中しているんです。県民投票で「基地はいらない」という結果が出て、政府も本土にいるひとたちもみんなそれを無視しています。これも沖縄に対する差別です。沖縄の問題は、日本みんなの問題なんだということを伝えたいです。

沖縄のひとたちはみんなとても明るいんです。さまざまな歴史があるなかで、武力ではなく、おいしい食べ物や音楽、踊りや空手など、独自の文化を持ち、訪れるひとたちをもてなすことで生き残ってきました。そのすばらしい文化を誇りに思っているけど、本土に來ると沖縄は差別されてしまう。私にはそれに打ち勝とうという気持ちがありました。いまは、どうやって沖縄の歴史を次の世代に伝えていくのかが私たちの使命だと思っています。過去のことにはなかつたことにしない。沖縄の文化とともに、歴史を伝えていかなければいけません。

学校の先生方も、沖縄のことはあまり知らない方が多いのではないのでしょうか。ぜひもっと知ってほしいと思います。基地問題でなくてもいいんです。文化でもいい。先生たちが知ることで、子どもたちにも沖縄を知るきっかけをつくってもらえたらうれしいです。